『PUBLIC OFFICER’S ONLINE SESSION』

～DAY2～

【開催日】
11 月 6 日（金）
【主催】
・宮嶋拓郎 ／ 長野県庁

【場所】
オンライン会議：Zoom

【参加者】
・菅野永 ／ MAKOTO WILL 代表
・齊藤ゆか ／ 山梨県北杜市
・仁平貴子 ／ 千葉県
・佐藤正和 ／ 秋田県羽後町

トークセッション

宮嶋拓郎さん （長野県） ：
はじめに、齊藤さんお願いしてもよろしいでしょうか？

齊藤ゆか（山梨県北杜市） ：
はい、斎藤ゆかです。山梨県の北杜市というところの自治体で、サントリーの白秋とかを作っているところで水がとても綺麗なところです。地元の民間企業に就職してから、公務員になりました。商業関係の仕事で総務で選挙管理委員などをやっていて、今年の 3 月まで 2 年間地域活性化センターに出向していて、ずっとやりたかった広報に来て働いています。

宮嶋拓郎さん （長野県） ：
ありがとうございます。
それでは次に 6 時の公共の仁平さん、お願いします。

仁平貴子さん （千葉県） ：
埼玉出身で、千葉の県庁で働いています。
元は国際関係を勉強していて、留学していたりした結果、SAVE THE CHILDREN という国際協力 NGO とかにインターンでいったり、社会福祉協議会のボランティアコーディネーターをやったり、民間企業やミャンマーの在京大使館(品川)で働いたりして、県庁職員になったというキャリアです。県庁では産業振興やアクアラインという高速の橋を走るマラソン大会の企画や東京 2020 オリンピック・パラリンピックの都市ボランティア企画営業を担当しています。

2 年間有志の公務員のコミュニティをベースに、2017 年 12 月 NPO 法人 6 時の公共を設立しました。

宮嶋拓郎さん （長野県） ：
ありがとうございます。
それでは、最後に佐藤マサカズさんお願いします。

佐藤正和さん （秋田県羽後町） ：
秋田県魚町というところの役場職員をしている佐藤正和と申します。
イノベーターを志す若手人材というよりは、地域のお兄さんを人生の目標に掲げて生きている人間です。

経歴で言うと地元の高校を卒業した後、群馬の大学に進学して、地方銀行への就職を経て役場入庁 8 年目になります。最初障害者福祉担当をして、その後「若手チームで何かやりなよ」と言われまして、チームを立ち上げた流れで NPO 法人を立ち上げました。現在はキャリア教育や地域課題解決などをやっていて、そこに出向させてもらいっています。

宮嶋拓郎さん （長野県） ：
菅野さん、みなさんモチベーション高く仕事に取り組まれていると言うのは本当にその通りだと思うのですが、お話聞かれてどんな印象ですか？

菅野永（MAKOTO WILL 代表）：
私もかつて公務員だったんですが、あまり上手くいかないまま終わってしまった感じでした。みなさんにもそのような過去があるとは思わないんですが、何か変われた経験などお持ちなのかは聞いてみたいですね。

宮嶋拓郎さん（長野県）：
みなさん、ありがとうございます。ここからは、インタビュー形式でお話伺っていきたいと思います。
まず、齊藤さん。齊藤さんの記事を拝見してすごいと思ったのが、周りと対話して考えるのが大事と書かれていたのですが、普通だとそれができる環境とできない環境があると思いまして、どうしてどんな状況でもそのように振舞うことができるのでしょうか？

齊藤ゆかさん（山梨県北杜市）：
私地域活性化センターに行く前は、職場内では大人しくしていたつもりだったんですね（笑）
地域活性化センターはメンバーに恵まれたこともあって、行って良かったと感じています。とにかく自分たちの意見をぶつける訓練をしていたような感じでした。

当時の上司がみなさんと同じで NPO 法人のメンバーに入っていたりとか地域づくりとか積極的な人で、本当に市民の声を聞くことを実践された方々だったのもあると思うのですが、自分の意見を自分の言葉で表現するということを訓練されましたね。

でも地域活性化センターから戻ってきて、上下関係がはっきりしていることや横のつながりがないことにとても悲しかったですね。フラットな関係で対話できる環境にいたのに、急にそれがなくなってしまい上の人にも何も言えなくなってしまったと言うか。

私は今年 33 歳になるのですが、20 代の若い子たちが違うと思ったことを違うと言えないと思うと悲しいですね。だから下に若い子たちがいる時に、目上の人にもはっきりものが言わないと思って、以前と比べて自分の意見を伝えるようになったと思います。

菅野永（MAKOTO WILL 代表）：
地域活性化センターに行かれてマインドセットが変わった方は前にもお会いしたことがあるのですが、齊藤さんの場合はどんな体験が一番影響があったのですか？

齊藤ゆかさん（山梨県北杜市）：
なんかやっぱり地域活性化センターが自治体と異なるのは、職員の年齢層の若さですね。私の代だと、めちゃくちゃ若い子が多かったんですね。20 代が 6-7 割とかいて、自分が最年少とかだと思って言ったら実は年齢上目の層だったりとか(笑)

菅野永（MAKOTO WILL 代表）：
一方で先ほどおっしゃっていたような目上の人にものが言えないなどと言う壁に関しては、どの辺が原因だと思いますか？

齊藤ゆかさん（山梨県北杜市）：
どうなのでしょうね。でも普通の会社で言う部長や課長クラスの人に言っても聞き入れてもらえないような雰囲気があって、逆にそのような人達が何か言うとすんなり採用されてしまったりだとか結構起こっていますね。給料が年功序列で決まることや長くいる人の方が偉いという雰囲気はあるのではと思います。

菅野永（MAKOTO WILL 代表）：
ありがとうございます。

宮嶋拓郎さん（長野県）：
続いて仁平さんお願いします。
仁平さんの記事を読んで思ったのが、現在の県庁のお仕事に就くまでに様々なことをされていて、今では行政を身近に感じてもらう活動をされていると思うのですが、こういう切り口や新しい発想を出す上で何を意識されているんですか？
私はずっと公務員として働いているので、あまり組織の違和感などは感じることが少ないと思っています。

仁平貴子さん（千葉県）：
正直、役所で働く前からあまり役所の改革については期待感はありませんでした。とても難しい課題を普段から抱えている会社(組織)であるから、変わることも簡単なことではないと思っていたんですね。実際に働いてみて自分でも大変な仕事だと認識していますが、それでもこれまで自分が働いてきた環境での当たり前が通じないのが事実です。

基本的に全面否定などはしないようにしていますが、たまに”分からない言葉”を使ってみることや違った切り口で新しい事業を進めて顧客の反応が良かったりすると、それが良い結果を出すことになります。

そうすると、ちょくちょくみんなが真似をしてくれて、中には自分を越えようとして頑張ってくれる若い子も出てくるように思っているので、別に大したことはできていないのですが、良い影響力を与えられるようにと意識はしています。

菅野永（MAKOTO WILL 代表）：
民間企業に対して支援して欲しいこと、6 時の公共として地域づくりで何を重視されているのかお聞きしたいです。

仁平貴子さん（千葉県）：
そうですね。役所の中だと高い予算をかけないと事業は作れないと思われがちですが、実は少ない予算でもベンチャー的に次々事業は生み出せると思うので、民間企業さんの持ち合わせている事業パッケージみたいなものをご紹介頂けると嬉しいです。

宮嶋拓郎さん（長野県）：
ありがとうございます。
話は変わりますが、佐藤さん、短いスパンの中でしかも限られた予算でいろいろな事業をされていると思うのですが、普通の自治体の一年のスケジュールだとそこまで多くの事業に着手できないと思ったのですが、何を意識されてことなどありますか？

佐藤正和（秋田県羽後町）：
齊藤さんや仁平さんのような大きな地域の事情は小さな地域だと当てはまらないと思っていて、私が住む魚町では特に「とにかくやってみよう」という精神が残っていて、山の真ん中に”ここが地球の真ん中です”っていうオブジェを立ててみたり、銀座にトラクターで花嫁探しに行ったりとか、突拍子もないことをやってみるという歴史・風土があって、やってみないと分からないということはすごく大事にしている地域だと認識しています。
自分もその風土に乗って、周りを気にせず突っ走ってきたような感じです。

宮嶋拓郎さん（長野県）：
ありがとうございます。みなさんそれぞれ面白い話を聞かせて頂いて、お互いの良いところを組み合わせると良い相乗効果が生まれるのではと思いました。

齊藤さんの横のつながりがないみたいな問題について、小さい町だと顔を知っている人も多いと思うのですが、その辺について佐藤さんのご意見頂きたいです。

佐藤正和さん（秋田県羽後町）：

そうですね、前は”みんなでやることが正義”みたいな風潮があったのでやりづらい部分もありましたが、段々と行動したことで一緒にやってくれる人がいると感じています。

確かに知り合いがたくさんいるので色々言われることもありますが、それでも仲間はいるので気にはしていないです。逆に色々言う人達がどんなことをしたいのか？については聞くようにしているので、様々な事業をするきっかけになっていると思います。

ここでみなさんにお聞きしたいのですが、みなさんは公務員としてやりたいことをやっているのか、それとも一個人としてやりたいことをされているのですか？

仁平貴子さん （千葉県） ：
私の場合も、公務員というブランドを利用してやっていますね。
日中の公務員としての活動と夜の 6 時の公共の活動は切り離していますが、扱っているのは公務員の内容ですから秘密保持にかからない一般化した情報を情報商材にしています。

あとは公務員の方々が日中働いている時に言いたいけど言えないことを、夕方・夜に「言える範囲」で話すという場を設けています。

佐藤正和さん （秋田県羽後町） ：
齊藤さんはいかがですか？

齊藤ゆかさん（山梨県北杜市） ：
私は NPO 法人などで活動はしていなくて公務員一本で働いていて、パブリックなものは考えていないです。でも、ふとした時に公務員としての”おいしさ”みたいなところは感じることはあります。例えば公務員って仕事をしている時以外町に関わることはないと思われがちですが、実はまちを歩くだけで褒められたりすることもあるんです。話が面白かったりするだけで、「公務員っぽくない」と言われたりとか。そういう一言が嬉しかったりするんですよね。

もちろん、言われていい気分になっているだけではダメなので、その後は仕事しようと思いますが。

宮嶋拓郎さん （長野県） ：
色々経験されてきた、仁平さんはこの公務員としてのアドバンテージについてはどうですか？

仁平貴子さん （千葉県）：
私 A4 の用紙に明朝体で文字びっしり書くのがとても嫌で、あれって慣れている人じゃないと読めないじゃないですか。

今の時代小さい文字で目を凝らさないと読めないものは適切ではなくて、パッと見て分かる動画の時代だと思うんですね。
私は以前デジタルハリウッド大学という映像制作やコンテンツ制作のプロを育成する専門学校に数年前に通って動画を作る技を身に付けたので、運営する NPO では動画配信などをやっていたのですが、コロナになったら急に公務員の方も使いたいと言うようになってきたんですね。

コロナ本部に派遣された時には、ホテルを借り上げて軽症者を集めるといった政策を取ったのですが、その運用の仕方も紙で書いても伝わらないんですよね。だから、みんなで患者とスタッフの役を演じながらロケをして動画を撮影し役所の研修動画としてアップしたんです。そしたら、動画を見た人達が「この動画を作った方教えてください」とすごい反響があったんです。

何が言いたいかというと、先進的でも本当に必要だと思うことを続けていれば、いつか役所の方が理解した上で頼ってくるということなんです。だから信じて突き進めばいいと思っています。